

【発表 NO.1】

研究発表

外国人児童生徒等教育の視点から見る小学校道徳教材

—「支援の客体」から「対等な主体」への転換—¹⁾

小谷美帆（鳴門教育大学大学院生）

1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、小学校道徳教材における他国の人々や文化の描かれ方の通時的変遷を明らかにし、その変化が外国人児童生徒等教育にいかなる示唆を与えうるかを検討することである。近年、日本の学校現場では外国人児童生徒の在籍数が増加しており、外国人児童生徒等教育は日本語指導や学習保障にとどまらず、学級全体の人間関係や他者理解のあり方を含む課題として捉え直す必要がある。また、道徳科は児童の考え方や価値観を直接的に扱うという特質上（池田、2019）、価値観の押し付けや刷り込みが懸念されやすく、その教材は「隠れたカリキュラム」として作用する可能性が高い（木村、2019）。そのため、もし教材の描き方に偏りがあれば、児童の中に無意識の偏見や歪んだ優越感を形成する危険性がある。これまで、道徳教科書に描かれる登場人物のジェンダーバランスや、障害者像には偏りがあることが指摘されてきたが（池田、2019；上森・栖原、2020）、他国の人々や文化、また外国人児童がどのように描かれてきたかを検討した研究は十分とはいえない。

2. 方法

2.1 データ

分析対象は、使用時期の異なる副教材『心のノート』（平成 14 年度使用開始）、『私たちの道徳』（平成 26 年度使用開始）および検定教科書 3 社（令和 6 年度使用開始・東京書籍、日本文教出版、光村図書）の計 24 冊である。

2.2 分析手順

対象とした教科書から、他国の人々や文化が描写された教材を抽出した。抽出した教材について、(1)教科書および学年段階別の出現状況、(2)内容項目の分布、(3)登場する国の数とその内訳、(4)日本人との交流場面の 4 点で分析を行なった。併せて、挿絵や教材の構成などの質的な側面でも考察を加えた。

3. 結果と考察

分析の結果、抽出教材の数や割合を見ると、『心のノート』における抽出教材は全教材の 8% と限定的であった。一方、『私たちの道徳』では、分析対象の中で最も高い割合を示した。しかし、その過半数が先人・著名人の名言や生き方を取り上げた教材であり、他国の人々を学習の対象として一方的に捉える傾向が強かった。それに対して検定教科書では、抽出教材は依然として全教材の 10% 以上を占めていた。

外国人児童生徒等教育の視点から特に重要な示唆が得られたのは、日本人との交流場面における変化である。『心のノート』では、交流場面を含む教材自体が限られており、外国人児童が描かれた教材は見られなかった。『私たちの道徳』では、交流場面を含む教材の割合が、対象とした教科書の中で最も低かった。日本で暮らす外国人児童が登場する教材が 1 編確認されたが、そ

の児童にセリフはなく、「やさしくしてあげるべき存在」としての一方的な描写にとどまっていた。対して検定教科書では、2 種の副教材よりも多くの割合で交流場面が確認された。外国人児童とも、対話を通じて相互理解を図るプロセスが描かれるようになった。外国人児童が自らの言葉で自国の文化や考えを説明し、話し合いによる解決を図る様子や、主人公と外国人児童が互いの言語で挨拶を交わす様子が描かれた教材が見られた。さらに、外国人児童が主人公にとって、運動でもベーゴマでも敵わない存在として描かれる事例も確認された。さらにここでは、外国人児童の言葉「サンキュー」が、「元気になる不思議な言葉」として肯定的に受け止められていた。副教材『私たちの道徳』での、日本語が話せないことに着目した描写とは対照的に、外国人児童の能力や肯定的な側面が描写されている。これらの結果から、近年の道徳教材では、外国人児童生徒が単なる支援の客体としてではなく、学級を構成する対等な主体として描かれる方向へと転換が進んでいることが示唆される。また、挿絵において、多様なルーツをもつ児童が学級の一員として描かれる事例が 3 社すべての検定教科書で確認された。具体的には、髪や肌の色などの身体的特徴が他の児童とは異なる児童が登場していた。一部の教科書では、同様の身体的特徴をもつ人物が、教科書全体を通じて登場するキャラクターとして設定されている事例や、カタカナ表記の氏名をもつ児童が描かれている事例も見られた。このような事例は副教材では見られなかったもので、検定教科書においては、挿絵などの非言語情報でも、外国人児童の存在が可視化されているといえる。

4. まとめ

以上の結果から、道徳教材における外国人児童の描かれ方は、支援を必要とする客体から対等な主体へと転換していると結論づけられる。この変遷は、学級づくりにおいても、外国人児童を単なる「支援の対象」や「適応させるべき存在」としてではなく、共に学級や学校を作り上げる対等な存在として捉えることの必要性を改めて示している。また、教員には、教材に潜む他者像や関係性の前提を問い直し、批判的に検討する姿勢が求められる。本研究は、教材を批判的に読み解いた上で、児童の実態に合わせて不足する視点を補う授業づくりの重要性を示唆するものである。

注)

1) 小谷（2026）をもとにまとめたものである。

【引用文献】

池田賢市(2019)「道徳の教科書に描かれた障害者像の特徴と問題点」『教育学論集』61、中央大学教育学研究会、pp.33-47.

上森さくら・栖原佳乃子(2020)「小学校道徳教科書のジェンダー視点からの分析(1)」『教育実践研究』46、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、pp.53-61.

木村和美(2019)「人権の視点から考える道徳科教科書—小学校第 5 学年、第 6 学年の「親切、思いやり」に着目して—」『広島修大論集』59(2)、広島修道大学ひろしま未来協創センター、pp.215-229.

小谷美帆（2026）『小学校道徳教材における国際理解の扱いとその変遷—「他国」の描かれ方に着目して—』2025 年度鳴門教育大学大学院学校教育研究科修士論文